

## Hurricane と Typhoon

の命名法に見られる言語特性と人権意識：

日英比較表現論の視点からの比較文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 日英語比較, hurricane, typhoon, 行為者中心, 状況中心 キーワード (En): comparison, hurricane, typhoon, agent-centered, status-centered 作成者: 吉村, 耕治 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00006245">https://doi.org/10.18956/00006245</a>

# Hurricane と Typhoon の命名法に見られる 言語特性と人権意識

——日英比較表現論の視点からの比較文化——

吉 村 耕 治

## 要 旨

1953年以降、日本では台風を発生順に通し番号を付けて呼んでいるが、アメリカ合衆国では *hurricane* を個人名で呼ぶ慣行が定着している。米国では1953年にハリケーンの名称に女性の個人名の採用が正式に決まったが、1979年には女性名だけでなく、男性名の採用も決まり、1979年以降はアルファベット順に男性と女性の個人名が交互に使用されている。この現象は米国の人権意識の高さを表すだけではない。兄弟姉妹や、両親、上司にも個人名を用いる習慣が反映しており、行為者を重視する表現を好むという英語表現の伝統的な傾向とも深く結びついている。台風の呼び名には、「お兄 [姉] さん」「お父 [母] さん」「部 [課] 長」という立場や役職上の名前を敬称として用いる日本語の習慣が関連している。英語と日本語によって熱帯性低気圧の命名法が異なるという現象の根源に、「人を中心に考える」英語文化と「人と人の関係」、つまり、「状況を中心に考える」日本語文化という相違が内在している。

キーワード：日英語比較、hurricane、typhoon、行為者中心、状況中心

## 1. はじめに

激しい暴風雨を伴う大規模な熱帯性低気圧の表現は、*hurricane*, *typhoon*, *cyclone* など、地域や規模によって異なる名称が用いられている。アメリカ合衆国では *hurricane* の名称に女性名を採用することが、1953年に気象観測センターで決められたが、1979年には女性名だけでなく、男性名の採用も決まり、1979年以降は毎年、アルファベット順に男性と女性の個人名が交互に使用されている。このようにアメリカ合衆国ではハリケーンを個人名で呼ぶ慣行が定着している。一方、日本では1953年以降、台風を発生順に通し番号を付けて呼んでいる。ハリケーンの名前法が女性名から男性名と女性名の交互の併用に変化しているところに、合衆国におけ

る人権意識の高さが反映しているが、それだけの現象ではない。大修館書店発行『英語教育』（54巻9号、2005年11月号）の「特集：英語の名前のなぞ」で、望月ひろみ（2005：11）は、「ハリケーンに人名がついていることで、妙に親近感を抱いているのかもしれない」と述べている。確かに、個人名の使用は親近感を表すことがあるが、*U.S. News & World Report* (Oct 3, 2005 v139 i12 p22) には、“Katrina’s evil twin, Rita”（カトリーナの邪悪な双子、リタ）と述べられており、そのようなハリケーンにまで親近感を抱いているという考えには、論理に矛盾がある。ハリケーンと台風の命名法の相違には、兄弟姉妹や両親、上司にも個人名（first name）を用いる西欧や合衆国の習慣、及び、「お兄[姉]さん」「お父[母]さん」「部[課]長」という立場や役職上の名前を敬称として用いている日本の習慣が反映していると考えられる。つまり、家庭や会社内における「個人名の尊重」対「役職名（状況を示す表現）の尊重」という英語と日本語の言語文化に関わる要因が潜んでいると考えるのが妥当である。<sup>1)</sup>

最初に、台風や *hurricane* という用語の定義を明確にしたい。日本国内では最大風速が34ノット（毎秒17.49m）<sup>2)</sup> を超える熱帯性低気圧を「台風」と呼んでいるが、国際的には北西太平洋上にある10分間平均の最大風速が64ノット（毎秒34.98m）以上の熱帯性低気圧が *typhoon*（台風）と呼ばれている。熱帯性低気圧は海面水温が26℃程度以上の熱帯の暖かい海域から熱と水蒸気を貰うことによって発生し、北半球では反時計回りに渦を巻いている。世界中で1年間に発生する熱帯性低気圧の数は60個程度で、日本の気象庁が監視している北西太平洋領域内（赤道以北、東経180度以西100度以東）では「台風」と呼ばれ、アメリカ合衆国やフィジーが担当している日付変更線（東経180度）を越えた北太平洋の北東部と北中部、大西洋北部領域内では *hurricane* と呼ばれる。北大西洋西部に発生する熱帯性低気圧で、1分間平均の最大風速が時速74マイル（毎秒32.7m）以上のものが *hurricane*、風速が時速73マイル以下で39マイル以上の熱帯性暴風雨は“tropical storm”、風速が時速39マイル未満のものは“tropical depression” と呼ばれる。つまり、“tropical depression”⇒“tropical storm”⇒“hurricane”の順に風速が増し、“tropical storm”になった時に、名前が付けられている。<sup>3)</sup>

インドが担当しているインド洋北部と南部・太平洋南部で発生する大規模な熱帯性低気圧は *cyclone* と呼ばれる。この表現は、英国の気象学者である Henry Piddington (1797-1858) が「ヘビのとぐろ：渦巻いているもの」の意で1848年に使った語と考えられている。フィリピンの Baguio 付近を襲う熱帯性低気圧は、地名からの転用で *baguio* と呼ばれている。<sup>4)</sup>

本稿は、日英比較表現論の視点から熱帯性低気圧を表す *hurricane, typhoon, cyclone* などの命名法に反映している文化や人権意識を探ることを目標にしている。ハリケーンの名前に男性と女性の個人名を使用するという現象は、単にアメリカ合衆国における人権意識の高さを表すだけでなく、行為者を重視する表現を好むという英語表現の伝統的な傾向とも深く結びついている。英語と日本語によって熱帯性低気圧の命名法が異なるという現象の根源には、「人の中

心に考える」英語文化と「人と人の関係」、つまり、「状況（情況）を中心に考える」日本語文化という根源的な相違が内在していることを指摘したい。

## 2. 日本を含む北西太平洋領域内で発生した台風の命名法

日本では、1953年のサンフランシスコ講和条約（平和条約）締結以来、台風はその発生順に通し番号が付けられ、毎年、「台風1号」「台風2号」と呼ばれている。例えば、2006年の台風12号の正式名称は、「台風200612号」となる。台風が衰えて熱帯低気圧になった後、再び台風が発達した場合は、同じ番号を採用することに決められている。しかし、過去には日本においても「キティ台風」（1949年8月）とか「ジェーン台風」（1950年9月）と呼ばれる台風が存在した。これらの名称は、太平洋戦争後（1945年以後）、米軍の気象観測センターが付けた名前であった。米軍は太平洋域の台風を女性名で呼んでいたため、第二次世界大戦後、アメリカ合衆国の占領下にあった日本では、1947年ごろから1952年まで、1947年9月の「キャスリーン台風」、1951年7月の「ケイト台風」、1951年11月の「ルース台風」のように、米軍の気象観測センターが付けた女性名で呼ばれていた。ところが、太平洋戦争が終結する1945年までは、1934年9月の「室戸台風」のように、台風が上陸した場所の地名を用いて呼ばれていた。この台風の命名法には、その場やその時の状況を重んじる日本の文化が反映している。<sup>5)</sup>

北西太平洋領域内で発生した台風の名前には、2000年以降、日本を含めて、北西太平洋領域内にある14カ国から成る政府間組織の台風委員会に加盟する各14カ国が、名前を10個ずつ出して、動植物の名前、個人名、自然現象など合計140個の名前が定められている。このアジア名の一例を示すと、日本の台風200523号のアジア名は、140個の名前の6番目で Bolaven と呼ばれる。その14カ国が提出した名前には各国の言語文化が反映している。日本の気象庁がホームページで提示している資料を、国別にまとめ直したものを、表1に示す：<sup>6)</sup>

日本が命名したものを一番目から順に示すと、「てんびん座」（黄道上の第8星座；7月初旬の夕刻に南中）、「山羊座」（黄道上の第11星座；9月下旬の夕暮れに南中）、「ウサギ座」（2月の夕方に現れる南天の星座）、「かじき座」（黄道の南極にあり、日本からは見えない南天の星座）、「かんむり座」（7月中旬の夕刻に天頂にある北天の星座）、「くじら座」（天の赤道上の星座；初冬の夕刻に南中する大星座）、「コップ座」（晩春の夕方に南中する南天の小星座）、「コンパス座」（日本では見えない南天の小星座）、「とかげ座」（10月中旬の夕刻に南中）、「わし座」（天の赤道上の星座；日本では晩夏の夕暮れに南中）というように、すべて星座を表す日本語名である。そして、これらは西欧の星座の日本語訳である。『枕草子』（254）にも用いられている「すばる」のように、日本で古くから知られている星座ではないが、これらの名称は日本人の季節感や歳時に対する関心を反映する命名になっている。

表1 北西太平洋領域内で発生した台風の名前(140個:国別表示)

命名した国と地域	台風の名前の順番(呼称、カタカナ読み、意味)(数字の後のアルファベットは国ごとの順番を示す)
カンボジア	1a (Damrey, ダムレイ、象)、15b (Bopha, ボーファ、花)、29c (Kong-rey, コンレイ、伝説の少女の名前)、43d (Krosa, クローサ、鶴)、57e (Nakri, ナクリ、花の名前)、71f (Maysak, メイサーク、木の名前)、85g (Krovanh, クロヴァン、木の名前)、99h (Chanthu, チャンス、花の名前)、113i (Sarika, サリカー、さえずる鳥)、127j (Nesat, ネサット、漁師)
中国	2a (Longwang, ロンワン、龍の上)、16b (Wukong, ウーゴン、(孫)悟空)、30c (Yutu, イートゥー、民話のうさぎ)、44d (Haiyan, ハイエン、うみつばめ)、58e (Fengshen, フンシェン、風神)、72f (Haishen, ハイシェン、海神)、86g (Dujuan, ドゥージェン、つつじ)、100h (Dianmu, ディアンムー、雷の母)、114i (Haima, ハイマー、タツノオトシゴ)、128j (Haitang, ハイタン、野生リンゴ)
北朝鮮〔朝鮮民主主義人民共和国〕	3a (Kirogi, キロギ、雁〔がん〕)、17b (Sonamu, ソナム、松)、31c (Toraji, トラジー、人知れず咲く美しい花)、45d (Podul, ポードル、やなぎ)、59e (Kalmaegi, カルマエギ、かもめ)、73f (Pongsonga, ポンソナ、ほうせんか)、87g (Maemi, マエミー、せみ)、101h (Mindulle, ミンドゥル、たんぼ)、115i (Meari, メアリー、やまびこ)、129j (Nalgae, ナルガエ、つばき)
香港	4a (Kai-tak, カイタク、啓徳〔旧空港名〕)、18b (Shanshan, サンサン、少女の名前)、32c (Man-yi, マンニ、海峡の名前)、46d (Lingling, レンレン、少女の名前)、60e (Fung-wong, フォンウォン、山の名前〔フニャス〕)、74f (Yanyan, ヤンヤン、少女の名前)、88g (Choi-wan, チョーイワン、彩雲)、102h (Tingting, テンテン、少女の名前)、116i (Ma-on, マーゴン、山の名前〔馬の鞍〕)、130j (Banyan, バンヤン、木の名前)
日本	5a (Tembin, テンビン、てんびん座)、19b (Yagi, ヤギ、やぎ座)、33c (Usagi, ウサギ、うさぎ座)、47d (Kajiki, カジキ、かじき座)、61e (Kammuri, カンムリ、かんむり座)、75f (Kujira, クジラ、くじら座)、89g (Koppu, コップ、コップ座)、103h (Kompasu, コンパス、コンパス座)、117i (Tokage, トカゲ、とかげ座)、131j (Washi, ワシ、わし座)
ラオス	6a (Bolaven, ボラヴェン、高原)、20b (Xangsane, シャンセン、象)、34c (Pabuk, パブク、大きな淡水魚)、48d (Faxai, ファクサイ、女性の名前)、62e (Phanfone, ファンフォン、動物)、76f (Chanhom, チャンホン、木の名前)、90g (Ketsana, ケツァーナ、木の名前)、104h (Namtheun, ナムセウン、川)、118i (Nock-ten, ノックテン、鳥)、132j (Matsa, マツァ、魚の名前)
マカオ	7a (Chanchu, チャンチャー、真珠)、21b (Bebinca, バビンカ、プリン)、35c (Wutip, ウーティップ、ちょう〔蝶〕)、49d (Vamei, ヴァーメイ、陽気なつぐみ)、63e (Vongfong, ヴォンフォン、オズメ蜂)、77f (Linfa, リンファ、はす〔蓮〕)、91g (Parma, パーマ、マカオ料理の名前)、105h (Malou, マローウ、めう〔瑪瑙〕)、119i (Muifa, ムイファー、すもも)、133j (Sanvau, サンヴァウ、さんご〔珊瑚〕)
マレーシア	8a (Jelawat, ジェラワット、淡水魚)、22b (Rumbia, ルンビア、サゴヤシ)、36c (Sepat, セーパット、淡水魚の名前)、50d (Tapah, ターファ、淡水魚)、64e (Rusa, ルーサー、しか〔鹿〕)、78f (Nangka, ナンカー、果物の名前)、92g (Melor, メーロー、ジャスミン)、106h (Meranti, ムーランティ、木の名前)、120i (Merbok, マールボック、鳥の名前)、134j (Mawar, マワー、ばら)
ミクロネシア	9a (Ewiniar, イーウィニヤ、嵐の神)、23b (Soulik, ソーリック、伝統の酋長称号)、37c (Fitow, フィートウ、花の名前)、51d (Mitag, ミートク、女性の名前)、65e (Sinlaku, シンラコウ、伝説上の神)、79f (Soudelor, ソウデロア、伝説上の酋長)、93g (Nepartak, ニバルタック、有名な戦士の名前)、107h (Rananim, ラナニム、「こんにちは」)、121i (Nanmadol, ナンマドル、有名な遺跡の名前)、135j (Guchol, グチュール、うこん)
フィリピン	10a (Bilis, ビリス、スピード)、24b (Cimaron, シマロン、野生の牛)、38c (Danas, ダナス、経験すること)、52d (Hagibis, ハギビス、すばやい)、66e (Hagupit, ハグビート、むち打つこと)、80f (Imbudo, インブド、漏斗〔じょうご〕)、94g (Lupit, ルピート、冷酷な)、108h (Malakas, マラカス、強い)、122i (Talas, タラス、鋭さ)、136j (Talim, タリム、鋭い刃先)
韓国	11a (Kaemi, ケーミー、あり〔蟻〕)、25b (Chebi, チュービー、つばめ〔燕〕)、39c (Nari, ナーリー、花)、53d (Noguri, ノグリー、たぬき)、67e (Changmi, チャンミー、ばら)、81f (Koni, コーニー、鋭く鳴き声をあげる白鳥)、95g (Sudal, スーダエ、かわうそ)、109h (Megi, メーギー、魚)、123i (Noru, ノルー、のろしか〔鹿〕)、137j (Nabi, ナービー、ちょう〔蝶〕)
タイ	12a (Prapiroon, プラピロン、雨の神)、26b (Durian, ドリアン、ドリアン(果物名))、40c (Wipha, ウィパー、女性の名前)、54d (Rammasun, ラマサン、雷神)、68e (Mekkhala, メーカラ、雷の天使)、82f (Morakot, モーラコット、エメラルド)、96g (Nida, ニーダ、女性の名前)、110h (Chaba, チャバ、ハイビスカス)、124i (Kulap, クラー、ばら)、138j (Khanun, カーヌン、バラミツ〔果物名〕)
アメリカ合衆国	13a (Maria, マリア、女性の名前)、27b (Utor, ウトア、スコールイン)、41c (Francisco, フランシスコ、男性の名前)、55d (Chataan, チャターン、あめ〔雨〕)、69e (Higos, ヒーゴス、いちじく)、83f (Etau, エタウ、嵐雲)、97g (Omais, オーマイス、徘徊)、(Aere, アイレー、嵐)、125i (Roke, ロウキー、男性の名前)、139j (Vicente, ヴェセンティ、女性の名前)
ベトナム	14a (Saomai, サオマイ、金星)、28b (Trami, チャーミー、花の名前)、42c (Lekima, レキマー、果物の名前)、56d (Halong, ハロン、湾の名前)、70e (Bavi, バビー、ベトナム北部の山の名前)、84f (Vamco, ヴァムコー、ベトナム南部の川の名前)、98g (Conson, コンソン、歴史的な観光地の名前)、112h (Songda, ソングダー、北西ベトナムの川の名前)、126i (Sonca, ソンカー、さえずる鳥)、140j (Saola, サオラー、最近発見された動物の名)

〔本表は、日本の気象庁が提示している資料を、順番を示す記号を付けて、国別にまとめ直したものである。〕

それに対して、アメリカ合衆国が命名した10個の名前の中では、1個目に Maria、10個目に Vincente という女性名を用い、3個目に Francisco、9個目に Roke という男性名を用いている。男女の名前のバランスとアルファベットの順番を配慮した選択になっている。

香港は2個目に Shanshan、4個目に Lingling、6個目に Yanyan、8個目に Tingting というように、偶数の順番で少女の名前を採用している。タイでは3個目に Wipha、7個目に Nida という女性の名前を使用している。ラオスでは4個目に Faxai、ミクロネシアでも4個目に Mitag という女性名を用い、カンボジアでは3個目に Kong-rey という伝説上の少女の名前を用いている。ところが、アメリカ合衆国以外の国と地域ではすべて、香港でも、タイや、ラオス、ミクロネシア、カンボジアでも、男性名を採用していない。北西太平洋領域の台風委員会に加盟している14カ国の中で、男性名を台風の名前に採用しているのは、唯一アメリカ合衆国だけである。この事実は、アメリカ合衆国が台風の命名に関してのみならず、さまざまな分野で最も男女の基本的な人権のバランスを重視している国であることを反映している。

さらに、資料1から分かることは、暴風雨を伴い、甚大な被害を引き起こす恐れのある台風の名前に、一見、女性らしい、やさしくて穏やかなイメージの語句が採用されていると判断できる名前も見られるが、これは、レーダーに現れる台風の形状に由来している。例えば、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の3個目の Taraji（「人知れず咲く美しい花」の意）や8個目の Mindulle（「たんぽぽ」の意）がある。マカオの1個目の Chanchu（「真珠」の意）や2個目の Bebinca（「プリン」の意）、カンボジアの2個目の Bopha（「花」の意）や韓国の3個目の Nari（「花」の意）、ベトナムの2個目の Trami（「花の名前」を表す）とミクロネシアの3個目の Fitow（「花の名前」を表す）、マレーシアの7個目の Melor（「ジャスミン」の意）がある。これらの名称は、見かけ上の可憐さだけではなく、内面的な魅力や強さも含意しており、台風のレーダー上の形状や台風の性質の一面を反映した名称になっている。

表1の台風のアジア名には、女性らしいイメージというよりは、男性らしいイメージに属する、大きくて力強いものを表す語句のほうが多く含まれている。例えば、「象」を意味するカンボジアの1個目の Damrey とラオスの2個目の Xangsane や、フィリピンの2個目の Cimarron（「野生の牛」の意）、ラオスの3個目の Pabuk（「大きな淡水魚」の意）がある。また、ラオスの1個目の Bolaven（「高原」の意）、ミクロネシアの6個目の Sodelor（「伝説上の酋長」の意）も見られる。これらは、台風の持つ力強さを表す比喻表現になっている。

一種の比喻表現であると同時に、実体と表現の意味との隔たりが多少存在するため、ユーモア精神が窺える台風の名前もある。マカオの4個目の Vamei（「陽気なつぐみ」の意）、「さえずる鳥」を意味するカンボジアの9個目の Sarika とベトナムの9個目の Sonca、韓国の6個目の Koni（「鋭く鳴き声をあげる白鳥」の意）、マカオの5個目の Vongfong（「すずめ蜂」の意）がある。韓国の4個目には、「たぬき」を意味する Noguri が用いられている。

神の名前に因んで命名された台風もある。例えば、ミクロネシアの1個目の Ewiniar (「嵐の神」の意)、タイの1個目の Prapiroon (「雨の神」の意)、タイの4個目の Rammasun (「雷神」の意)、中国の5個目の Fengshen (「風神」の意) や6個目の Haisen (「海神」の意) がある。これらの台風の名前はすべて、台風の偉大な力を象徴している。

台風の性質を短い語で的確に表現した名前もある。この用例は、フィリピンが命名した台風の名前に多い。フィリピンの1個目の Bilis (「スピード」の意)、4個目の Hagibis (「すばやい」の意)、6個目の Imbudo (「漏斗」の意)、8個目の Malakas (「強い」の意)、9個目の Talas (「鋭さ」の意)、10個目の Talim (「鋭い刃先」の意) がある。また、アメリカ合衆国の4個目の Chataan (「雨」の意)、6個目の Etau (「嵐雲」の意)、7個目の Omais (「徘徊」の意) も、台風の性質を的確に表現した命名になっている。中国の1個目の「龍の王」を意味する Longwang や8個目の「雷の母」の意の Diamu もある。さらに、香港の7個目の「彩雲」を意味する Choi-wan のように絵画的な名前も存在する。<sup>7)</sup>

### 3. アメリカ合衆国の hurricane の命名法

アメリカ合衆国のハリケーンの命名法については、Central Florida Hurricane Center のホームページに、Ivan R. Tannehill (著) *Hurricanes: Their Nature and History* (1940) を参照しながら、簡潔な英語で説明されている。20世紀初頭までの数百年間は、アメリカ合衆国では西インド諸島を襲うハリケーンの多くは、上陸した日や場所に因んで名前が付けられていたという。例えば、上陸した日の聖人名に因んで付けられた名前には、西インド諸島中部の米国自治領の島 Puerto Rico を1825年7月26日に襲った“Hurricane Santa Ana” や、1876年と1928年の9月13日に Puerto Rico を襲った“Hurricane San Felipe (the first)” と“Hurricane San Felipe (the second)”, 1851年8月18日の“Hurricane Santa Elena”, 1867年10月29日の“Hurricane San Narciso”, 1899年8月8日の“Hurricane San Ciriaco” などがある (cf. I. R. Tannehill, 1940: 150)。場所の名前を用いた命名には、1900年9月8日に Texas 州の Galveston 湾南西を襲った“Galveston Hurricane 1900” がある (cf. I. R. Tannehill, 1940: 36)。当初は、大型のハリケーンや大きな被害を及ぼしたものだけに、名前が付けられていたようである。アメリカ合衆国で個人名がハリケーンの名前に採用される第一の要因は、キリスト教では聖人への崇敬が伝統的に信仰の一部と考えられており、その聖人の名前が祝日などに用いられていたために、ハリケーンの名前にも採用されたことである。

第二の要因は、George R. Stewart が *Storm* (1941年) という小説で、日本の南東に発生する storm に“Maria” という女性名を用いたことである。この小説の天気予報係は、“He considered a moment for more names in -ia, and thought of Maria. It was more homely than Antonia

or Cornelia” (p. 14) (彼はちよっとの間、さらに *-ia* でつづりが終わる名前を考えて、マリアという名を思いついた。マリアはアントーニアやコーネリアよりもありふれた名前であった) と語られている。この小説は多くの人に愛読されていたようで、第二次世界大戦後、大西洋で発生した熱帯性低気圧にも、女性名が採用される大きな要因になった。

1951年から1952年の2年間は、“radio phonetic alphabet” (無線用アルファベット) の用語がハリケーンの名前に応用されていた。アルファベット順に命名することによって、ハリケーンの順番を明示することが可能になった。Abel (エーベル: 文字 A を表す通信用語: 男子名; “A for Abel” [Abel の A] のように用いられる)、Baker (ベイカー: パン屋)、Charlie (チャーリー: 男子名)、Dog (ドッグ: 犬)、Easy (イージー: 容易な)、Fox (フォックス: きつね)、George (ジョージ: 男子名)、How (ハウ: どのように)、Item (アイテム: I と Item の頭韻による: 項目)、Jig (ジグ: 文字 J を表す通信用語)、King (キング: 王様)、Love (ラブ: 愛)、Mike (マイク: 男子名)、Nan (ナン: 女子名)、Oboe (オーボエ: O と Oboe の頭韻による: 木管楽器)、Peter (ピーター: 男子名)、Queen (クイーン: 王女)、Roger (ロジャー: 男子名)、Sugar (シュガー: 砂糖)、Tare (テア: 文字 T を表す通信用語: オオカラスノエンドウ)、Uncle (アンクル: 文字 U を表す通信用語: おじ)、Victor (ヴィクター: 男子名)、William (ウィリアム: 男子名)、X-ray (エックス・レイ: エックス線)、Yoke (ヨーク: くびき: 天秤棒)、Zebra (ゼブラ: シマウマ) である。これら26語のすべての通信用語の中で、男性を表す語は、Abel、Charlie、George、King、Mike、Peter、Roger、Uncle、Victor、William という10語も含まれている。それに対し、女性を表す語は Nan と Queen の2語だけである。女性を表す語は、Dog、Fox、Zebra という動物の名称を表す3語よりも少ない。無線用アルファベットとしては、多くの人に親近感を持たれる名前のほうが記憶に残りやすく、理解されやすい。このように負のイメージが含まれていない「無線用アルファベット」には、男性を表す語のほうが多く用いられており、男子名と女子名の不均衡が存在する。さらに、“sugar” という語はアメリカの略式英語では、男性が好きな女性に対して、少し見下して使われる非好感語である。これらの要素から、この無線用アルファベットは男性側の視点から作成されたものであることが窺える。そこで、この英語の無線用アルファベットは、1960年代の女性解放運動 (feminism) が起こるまでのアメリカ合衆国における男性中心社会の要素を反映している言語現象の一つである。

それと同時に、「無線用アルファベット」には男子名が10語、女子名が2語、合計12語の個人名が含まれており、人を表す語が26語中12語もある。この事実は、「人を中心に考える」文化が英語に存在していたことを示す一つの重要な言語上の証拠である。それとともに、1953年にハリケーンの名前に女性名が採用されることになる第三の要因にもなっている。

1952年になると、新しい “communications code word” (通信符号用単語: “A for Alfa”



〔Alfa の A〕のように用いられる単語)が導入された。Alfa (アルファ：文字 A を表す通信用語：ギリシャ語アルファベット第 1 字 alpha のもじり：アメリカ英語の簡略化されたつづり字の特徴が見られる)、Bravo (ブラボー：うまいぞ：イタリア語では男性に bravo を用い、女性には brava、グループには bravi を用いる)、Charlie (チャーリー：男子名；下線は旧無線用アルファベットと同じ単語であることを示す)、Delta (デルタ：ギリシャ語アルファベットの第 4 字：星座の中で明るさが第 4 位のデルタ星を表す)、Echo (エコー：こだま)、Fox-trot (フォックストロット：文字 F を表す通信用語：ダンスの短歩急調の活発なステップ)、Golf (ゴルフ)、Hotel (ホテル)、India (インディア：文字 I を表す通信用語：インド)、Juliet (ジュリエット：女子名)、Kilo (キロ：kilogram や kilometer などの短縮形)、Lima (リマ：ペルーの首都)、Mike (マイク：男子名)、November (ノヴェンバー：11月：初期のローマ歴では第 9 月)、Oscar (オスカー：男子名：アカデミー賞受賞者に与えられる小型黄金像)、Papa (パパ：文字 P を表す通信用語：父ちゃん)、Quebec (ケベック：カナダ東部の広大な州、州都)、Romeo (ロミオ：男子名)、Sierra (シエラ：スペイン・中南米の峰の突き立った山脈)、Tango (タンゴ：ラテンアメリカ起源の 4 分の 2 拍子のダンス)、Uniform (ユニフォーム：文字 U を表す通信用語：制服)、Victor (ヴィクター：男子名)、Whisky, (ウィスキー：whiskey や whisky のもじりになっており、アメリカ英語の簡略化されたつづり字の特徴が見られる)、X-ray (エックス・レイ：エックス線)、Yankee (ヤンキー：ニューイングランド地方の住民：広く米国人)、Zulu (ズルー：zero の頭文字 Z を表す通信用語)が、ハリケーンの名前に利用された。この新しい通信符号用単語においても、Charlie、Mike、Oscar、Papa、Romeo、Victor という男性を表す語が 6 語、採用されているのに対し、女子名は Juliet の 1 語だけである。旧無線用アルファベットと同じ用語が 4 語含まれているが、その 3 語までが男性名である。さらに、「いいぞ、でかした」の意で用いる語は、一人の女性に対して用いる brava や複数の人に用いる bravi でなく、一人の男性に対して用いる Bravo が採用されていることや、父親を表す Papa が採用されているのに、母親を表す Mama や Mamma は採用されていないことから、新しい通信符号用単語も、旧無線用アルファベットと同様、男性中心の社会を反映しており、男性側の視点から作成されたものであると指摘できる。<sup>8)</sup>

1952年の新しい通信符号用単語では、男性を表す語が 6 語、女性を表す語が 1 語で、人を表す語は Yankee を含めると、合計 8 語である。旧無線用アルファベットに比べると、4 語少なくなっているが、日本語の「和文通話表」(cf. 注 8)には 48 語中で、人を表す語は「子供」の 1 語しか含まれていない。日本語に比べて、英語の通信符号には人を表す語が多く用いられていることが、特徴的である。ここにも、人間を中心に考える英語の文化が見られる。

旧無線用アルファベットと新しい通信符号用単語の間で混乱が生じるようになり、その混乱を避けるために、1953年には正式に女性名をハリケーンの名前に採用することになった。ハリ

ケーンは、甚大な被害をもたらす恐れのある、取り扱いにくいものである。その負の価値を持つ名前に女性名が採用されていたところに、男性中心社会のものの考え方が反映している。しかし、1979年以降は、男女平等の原則に従い、ハリケーンの名前は、ABC 順で男性名と女性名が交互に付けられている。この1979年の変更には、1975年から1984年まで続いた国連の「国際婦人年」が影響している。

アメリカ合衆国に上陸するハリケーン数は、日本に上陸する台風の数よりもやや少ない。そこで、1年間分のリストは、21の名前で構成されている。Q, U, X, Y, Z で始まる名前は少ないため、これらの5文字は除かれており、6年周期で同じ名前が使われることになっている。

2005年からの6年分の126個の名前を、以下の表2にまとめることにする：

表2 北大西洋領域内で発生した Hurricane の名前

	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
1	Arlene	Alberto	Andrea	Arthur	Ana	Alex
2	Bret	Beryl	Barry	Bertha	Bill	Bonnie
3	Cindy	Chris	Chantal	Cristobal	Claudette	Colin
4	Dennis	Debby	Dean	Dolly	Danny	Danielle
5	Emily	Ernesto	Erin	Edouard	Erika	Earl
6	Franklin	Florence	Felix	Fay	Fred	Fiona
7	Gert	Gordon	Gabrielle	Gustav	Grace	Gaston
8	Harvey	Helene	Humberto	Hanna	Henri	Hermine
9	Irene	Isaac	Ingrid	Ike	Ida	Igor
10	Jose	Joyce	Jerry	Josephine	Joaquin	Julia
11	Katrina	Kirk	Karen	Kyle	Kate	Karl
12	Lee	Leslie	Lorenzo	Laura	Larry	Lisa
13	Maria	Michael	Melissa	Marco	Mindy	Matthew
14	Nate	Nadine	Noel	Nana	Nicholas	Nicole
15	Ophelia	Oscar	Olga	Omar	Odette	Otto
16	Philippe	Patty	Pablo	Paloma	Peter	Paula
17	Rita	Rafael	Rebekah	Rene	Rose	Richard
18	Stan	Sandy	Sebastien	Sally	Sam	Shary
19	Tammy	Tony	Tanya	Teddy	Teresa	Tomas
20	Vince	Valerie	Van	Vicky	Victor	Virginie
21	Wilma	William	Wendy	Wilfred	Wanda	Walter

[2011年以降は、このリストの retired name のみを別の個人名に入れ替えて用いられる。]

[National Hurricane Center の提示資料に基づく]

アメリカ合衆国で有名なハリケーンには、Atlantic-Gulf Hurricane 1919, Great Miami Hurricane 1926, San Felipe-Okeechobee Hurricane 1928, Florida Keys Labor Day Hurricane 1935, New England Hurricane 1938, Great Atlantic Hurricane 1944, Hurricanes Carol and Edna 1954, Hurricanes Connie and Diane 1955, Hurricane Audrey 1957, Hurricane Donna 1960, Hurricane Camille 1969, Hurricane Agnes 1972, Tropical Storm Claudette 1979, Hurricane Alicia 1983, Hurricane Gilbert 1988, Hurricane Hugo 1989, Hurricane Andrew 1992, Tropical Storm Alberto 1994, Hurricane Opal 1995, Hurricane Mitch 1998, Hurricane Floyd 1999, Hurricane Keith 2000, Tropical Storm Allison 2001, Hurricane Iris 2001, Hurricane Isabel 2003, Hurricane Charley 2004, Hurricane Frances 2004, Hurricane Ivan 2004, Hurricane Jeanne 2004 などがある。これらの例でも分かるように、1952年までは、地名も採用されているが、1953年以降はすべて人名が用いられており、1953年から1979年まではすべて女性名が採用されている。

1953年に女性名が正式にハリケーンの名前に採用された背景には、本節でみたように、アメリカ合衆国や英語圏の文化的な要素、人間を中心にした考え方が内在している。

#### 4. 欠番になった Hurricane の名前 (Retired Name)

アメリカ合衆国やフィジーにハリケーンが訪れる時期は、8月上旬から10月が多く、6月から11月がハリケーンの来襲期 (hurricane season) と呼ばれている。ある名前のハリケーンが甚大な被害や損害をもたらした場合、そのハリケーン名は少なくとも10年間は使用されない。1954年から2004年までの51年間に、61個のハリケーンの名前が引退している。英語の“retired name” (引退した名前; 欠番になった名前) という表現は、*retire* という語自体が一般的に「(人が) 引退する」というように、人に対して用いられる語である。そこで、“retired name” という表現自体も、ハリケーンを人のように扱う表現 (擬人化表現) になっている。ハリケーン名に個人名を採用するだけでなく、“retired name” という英語表現自体にも、「人を中心に考える」英語国民の言語表現上の特徴を確認することができる。

1954年から2004年までの51年間で欠番になっているハリケーンの名前を、発生年の順に示すと、1954 (Carol, Hazel), 1955 (Connie, Diane, Ione, Janet), 1957 (Audrey), 1960 (Donna), 1961 (Carla, Hattie), 1963 (Flora), 1964 (Cleo, Dora, Hilda), 1965 (Betsy), 1966 (Inez), 1967 (Beulah), 1968 (Edna), 1969 (Camille), 1970 (Celia), 1972 (Agnes), 1974 (Carmen, Fifi), 1975 (Eloise), 1977 (Anita), 1979 (David, Frederic), 1980 (Allen), 1983 (Alicia), 1985 (Elena, Gloria), 1988 (Gilbert, Joan), 1989 (Hugo), 1990 (Diana, Klaus), 1991 (Bob), 1992 (Andrew), 1995 (Luis, Marilyn, Opal, Roxanne), 1996 (Cesar, Fran, Hortense), 1998 (Georges, Mitch), 1999 (Floyd, Lenny), 2000 (Keith), 2001 (Allison, Iris, Michelle), 2002 (Isidore, Lili), 2003 (Fabian, Isabel, Juan), 2004

(Charley, Frances, Ivan, Jeanne) という62個が存在する。平均すると、毎年、約1.2個のハリケーンが欠番にされていることが分かる。このことからアメリカ合衆国は、日本ほどではないにしても、ほぼ毎年、熱帯性低気圧の被害を受けている国であることが分かる。

これらの欠番ハリケーン名を発生年とともにアルファベット順に並べると、Agnes (1972), Alicia (1983), Allen (1980), Allison (2001), Andrew (1992), Anita (1977), Audrey (1957), Betsy (1965), Beulah (1967), Bob (1991), Camille (1969), Carla (1961), Carmen (1974), Carol (1954), Cecilia (1970), Cesar (1996), Charley (2004), Cleo (1964), Connie (1955), David (1979), Diana (1990), Diane (1955), Donna (1960), Dora (1964), Edna (1968), Elena (1985), Eloise (1975), Fabian (2003), Fifi (1974), Flora (1963), Floyd (1999), Fran (1996), Frances (2004), Frederic (1979), Georges (1998), Gilbert (1988), Gloria (1985), Hattie (1961), Hazel (1954), Hilda (1964), Hortense (1996), Hugo (1989), Inez (1966), Ione (1955), Iris (2001), Isabel (2003), Isidore (2002), Ivan (2004), Janet (1955), Jeanne (2004), Joan (1988), Juan (2003), Keith (2000), Klaus (1990), Lenny (1999), Lili (2002), Luis (1995), Marilyn (1995), Michelle (2001), Mitch (1998), Opal (1995), Roxanne (1995) となる。このリストから A で始まる名前が7個、B が3個、C が9個、D が5個、E が3個、F が7個、G が3個、H が5個、I が6個、J が4個、K が2個、L が3個、M が3個、O が1個、R が1個あることが分かる。主に A から M まで、つまり、13番日までのハリケーンが、大きな被害を与えており、1・3・6番目のハリケーンの被害が、心配される可能性が高い。ところが、1995年はハリケーンの数に異常に多かったことが分かる。

風速が時速39マイル以上の熱帯性暴風雨 (tropical storm) は、年間に12個から15個発生すると予想されており、その内の6個から9個がハリケーンに発達し、さらに、その内の2個から5個が風速111マイル以上の大型ハリケーンになると予想されている。

2004年にはアメリカ合衆国本土にハリケーンが6個上陸し、その内の5個がフロリダ州に上陸している。また、2005年のメキシコ湾岸地域のハリケーンの被害は甚大であり、アメリカ合衆国の抱えている難題の一つである貧富の差を世界中に知らせる結果にもなった。<sup>9)</sup>

## 5. Hurricane の名前に見られる英語の文化—日本語との比較

英語のハリケーンの名前には人名が用いられてきたが、その人名は姓ではなく、個人名 (英国では Christian name, baptismal name, forename、米国では first name, given name) である。個人名を尊重する考えは、アメリカ合衆国の生活習慣だけではなく、西欧の文化の中にも見ることができる。現在でも洗礼や結婚の儀式的場で、キリスト教会が認めている唯一の名前は、個人名である。ところが、日本では長く存続してきた家制度の影響で、個人名よりも姓のほうが尊重されることが多かった。個人名の尊重は人間の尊重が基盤になっているのに対し、家制

度では長男や次男などの家族の構成員である人間の関係、つまり、個人のおかれている状況を尊重する精神を基盤にしている。この文化的な違いは、大きい。

2005年のハリケーン・カトリーナの被害は甚大で、何週間後も大部分の犠牲者の名前が判明しなかった。そのことを嘆き、*The New York Times* (Oct 5, 2005 pA1(L)) には、“In a country that cherishes the names of the dead, reads them aloud, engraves them in stone and stitches them into quilts, it is odd that Hurricane Katrina’s victims remain, more than a month later, largely anonymous.” (死者の名前を大事にし、その名前を読み上げ、石に彫り込み、キルトの布に縫い込む国で、奇妙なことに、[被災後] 1カ月以上も経つのに、ハリケーン・カトリーナの犠牲者の名前の大部分が不明なままである) と述べられている。ここでは、死者であろうとも、個人の名前を重視する精神が明確に表現されている。

また、*The New American* (Oct 3, 2005 v21 i20 p10(6)) には、“Katrina exposes fatal flaws; Hurricane Katrina did more than destroy the Gulf Coast.” (カトリーナは重大な欠陥を暴露している、つまり、ハリケーン・カトリーナはメキシコ湾沿岸地域を破壊しただけではなかった) と述べられており、人災の可能性が示唆されている。

そして、“Hurricane Katrina is the worst natural disaster to hit the United States.” (*The New American* Oct 3, 2005 v21 i20 p10(6)) (ハリケーン・カトリーナは、アメリカ合衆国を襲った最悪の自然災害である) と述べられ、“Since Hurricane Katrina Rolled In, the Cash Has Rolled Out.” (*The New York Times* Oct 5, 2005 pC1(L) (Business/Financial Desk) Rivlin, Gary) (ハリケーン・カトリーナが渦巻きながらやってきて以来、お金が転がり出て行って [どんどん出て行って] いる) という見出し (headline) も書かれている。さらに：

- 1) After fleeing Hurricane Katrina, they were being chased out of Texas by Hurricane Rita. (*The Philadelphia Inquirer* (via Knight-Ridder/Tribune News Service) Oct 12, 2005 pNA)

(ハリケーン・カトリーナから逃れた後、人々 [その土地の住民たち] はハリケーン・リタによってテキサスから追い出されていた。)

- 2) Hurricane Stan and related storms left more than 1,500 people dead or missing in Central America and Mexico. (*Globe & Mail* (Toronto, Canada) Oct 21, 2005 pR2)

(ハリケーン・スターンとそれに関係する暴風雨が去った後には、中央アメリカとメキシコには1,500人を超える死者や行方不明者が出た。)

例1では、人を表す人称代名詞 *they* が主語として用いられ、人間を中心にした表現になっている。また、ハリケーンにはカトリーナとリタという人名が付けられ、ハリケーンが擬人化されている。この擬人化表現には、親近感は見られない。そうではなく、行為を引き起こさせるものを際立たせる表現効果が備わっている。これは、「する」言語である英語の特徴を反映し

ている。例2では、ハリケーン・スターンとそれに関する暴風雨が、無生物主語として用いられ、その後に、意志を含む動詞が続く表現構造になっている。このような「無生物主語+意志を含む動詞」の構文の頻度が英語では高い。だが、日本語では無生物主語が存在しても、その後に意志を含む構文は、ほとんど見られない。例えば、「嵐が去った」という日本語には、無生物主語が用いられているが、日本語の動詞「去った」には意志は含まれておらず、完了した状態が表現されているだけである。このような英語の無生物主語は、日本語では副詞として表現され、英語の目的語の animate (動くもの) が日本語では主語になることが多い。この構文は、人間を中心にした考え方を好む傾向が英語に存在するがゆえに見られる表現である。

さらに、ハリケーンに個人名を付けて擬人化する英語の表現方法は、それぞれのハリケーンの個性を認め、ハリケーンを特定化することを容易にしていると指摘することができる。それに比べて、日本語の「台風1号」や「台風2号」という表現方法は、それぞれの台風の個性を認める精神が弱いと言える。

この精神は、日本語では会社内では役職名を用いて「社長」とか「部長」、あるいは「お客様」と表現するが、英語では個人名の使用が一般的であることに認められる。家庭内でも、夫婦がお互いを、子どもの誕生とともに、日本語では「お父さん」とか「お母さん」と呼び、人と人の関係を重視した表現を用いているが、英語圏では子どもが親を“Dad”や“Mom”と呼んでも、夫婦がお互いを“Dad”や“Mom”と呼ぶことはない。この相違には、個と全体の対比が存在する。日本語では全体の調和、つまり、人と人の対人関係を重視する表現が用いられる傾向が強く、英語圏では一人ひとりの identity (個性) を尊重する表現が好まれる。

英語では「兄」と「弟」、「姉」と「妹」の区別をすることが少ない。例えば、“Kathy and her sister are so much alike that I mistake her for her sister.”と表現されるが、日本語では「姉」か「妹」を用いて、「キャシーとその妹(あるいは姉)は、キャシーを妹(あるいは姉)と間違えるほど、よく似ている」と言われ、姉か妹かが分からないと、日本語訳が難しくなる。これは、日本社会の年功序列を尊ぶ精神を表しているため、英語圏の「横社会」と日本の「縦社会」を反映していると考えられる。しかし、縦社会と横社会の区別よりも、もっと根本的な違いがあるように思われる。年齢が上か下かという問題は、個人の努力で変わるものではない。つまり、日本語では生まれた「状況」を重視する表現を用いている。それに対して、英語圏が「横社会」であるという指摘は、「状況」よりも、一人ひとりの個人の能力や個性を尊重していること、つまり、「個人」を重視していることを表している。

英語の表現では、“That reminds me.”(それで思い出したよ)とか、“The thought of failing in the exams scared me.”(試験に失敗したらと考えると、[私は]怖くなった)と言われるが、日本語では“*That*”や“*The thought of failing in the exams*”という無生物主語を主語に用いると、不自然な日本語になる。後者の例文で、me を主語にすると、“I was scared at the

thought of failing in the exams.”となり、簡潔性に欠けた表現になる。表現に力強さを与え、意味を明晰なものにするために、英語は受動態を避けて、名詞中心構造や「無生物主語＋意思を含む動詞」という表現を好む傾向がある。さらに、これらの表現は、「する」言語の表現であり、一種の擬人化した表現になっている。

英語には、このような擬人化した表現が多く用いられている。つまり、英語は「行為者」を際立たせる表現になっている。この事実も、「人間重視」の考えが強いことを反映している。そこで、(人ではない)あらゆるものを擬人化する傾向が生まれている。逆に、日本語では「自然に、そうなる」という表現を好む傾向があり、「行為者」を目立たなくさせる傾向がある。これは、人ではなく、「状況重視」の考え方を反映していると考えられる。

Heather Graham の *Hurricane Bay* (2002) は、Kelsey という女性が主人公で、幼なじみの Sheila に対する友情を描いた、南フロリダが舞台のロマンティック・サスペンスである。この「ハリケーン」は、騒動が生じることを表しており、意味が自然現象から変化して、一般化された用法になっている。

日本語では「いただきます」、「行ってきます」、「お疲れ様でした」、「よろしくお願いします」というような決まり文句の使用頻度が高い。これは、日本語は各人の個性的な表現よりも、状況にあった表現を求めていることを表している。言い換えると、日本語に決まり文句の使用頻度が高いのは、人と人の関係を表す「状況」を重視する精神から、個々の状況に相応しい表現を発達させてきたことの表れであると考えることができる。

このような英語と日本語の文化の違いは、風土の違いから生じているように思われる。日本のわびや寂びの精神も、暑過ぎず寒過ぎず、生活する上で厳し過ぎることのない、穏やかで豊かな風土の中でこそ、育つことができたものである。

## 6. おわりに

ハリケーンの命名法が1979年に女性名だけでなく男性名も採用することが決まり、女性名から男性名と女性名の交互併用に変化しているところには、アメリカ合衆国における人権意識の高さ、基本的人権を尊重する精神が反映されている。しかし、英語の言語現象には、1960年代の第二次女性解放運動が起こるまでの男性中心社会の要素が色濃く反映されている。例えば、アメリカ合衆国では社会的に親近感が感じられ、負のイメージが無い無線用アルファベットや通信符号用単語には、男性名のほうが圧倒的に多く用いられていた。そして、負のイメージが強いハリケーン名には、女性名の採用が決められていた。他方、日本語の和文通話表には個人名はまったく採用されていない。ここに、英語と日本語の言語文化的相違が見られる。

言語文化的相違は熱帯性低気圧の命名法にも反映している。この現象の根源には、「人の中

心に考える」英語文化と「人と人の関係」、つまり、「状況を中心に考える」日本語文化という相違が内在している。日本語の「台風10号」「台風11号」のように番号を付けて台風を表すところに、一つひとつの個々の事物よりも全体の中での個を重視する精神が反映している。この日本語表現の特徴は、謙譲の美德を伝える表現が多い日本語の美しさにも深く関係している。それに対して、英語には人間中心の表現や擬人化表現を好む傾向がある。「する」言語や‘have’言語の特性を持つ英語には、行為者を重視し、行為者を際立たせる効果が見られる。“Hurricane Dennis” などのように、ハリケーンにも人名を用いるところに、(人間だけではなく、事物であっても) 行為者を際立たせようとする英語表現の特徴が現れている。ここには、人間を重視するという英語国民の伝統的な意識が表れている。この人間を中心に考え、個人を重視する伝統は、人権を尊重する精神として、現在、光彩を放っている。

日本の社会と英語圏の社会の違いを考える時、従来、「タテ社会とヨコ社会」という指摘が行われてきた。しかし、日本語と英語の表現を考えると、もっと根本的な相違があると考えられる。それは、人と人の間の状況や場の状況を重視する日本語に対して、個人や行為者を際立たせる英語という違いである。つまり、「状況」対「人・行為者」という言語文化的違いが、日本語と英語の多様な表現上の違いを生み出す根源的要素になっていると考えられる。この違いは、おとり捜査を認めない社会と認める社会、履歴書に写真や生年月日の添付を求める社会と求めない社会というように、種々の社会現象の違いを生み出す要素にもなっている。

## 注

- 1) *storm* は古英語からの本来語であるが、*hurricane* は1555年にスペイン語を通して入ってきた借用語で、*cyclone* は1848年の新造語と考えられている。英語の *typhoon* (台風) は、台湾のほうからやってくる強風(嵐)を意味する広東方言の中国語 *tai fung* (大風) を、アラビア人がアラビア語で *tūfān* と呼び、ヨーロッパに伝えたもので、ギリシャ語の *tāphōn* (渦巻く風、旋風) の影響も受けていると考えられている。*typhoon* という語は、1588年に英語に借用されている。Cf. Central Florida Hurricane Center のホームページ; and Ivan Ray Tannehill (1940). See also, 望月ひろみ (2005: 10).
- 2) 1時間に1海里の距離(1852m)の速度が1ノット(knot)であるので、1ノットは1秒間に0.5144444mの速度になる。この種のインターネット情報は多様であった。注意が必要。
- 3) ハリケーンの気象通報に用いられる‘Beaufort scale’ (ビューフォート風力階級; 英国軍人の Sir Francis Beaufort (1774-1857) の考案) は、次の0から12までの13階級に分類されている。Beaufort No. 0: calm (静穏、1マイル未満、1km未満)、No. 1: light air (至軽風、1-3マイル、1-5km)、No. 2: light breeze (軽風、4-7マイル、6-11km)、No. 3: gentle breeze (軟風、8-12マイル、12-19km)、No. 4: moderate breeze (和風、13-18マイル、20-28km)、No. 5: fresh breeze (疾風、19-24マイル、29-38km)、No. 6: strong breeze (雄風、25-31マイル、39-49km)、No. 7: moderate gale (or near gale)



- (強風、32-38マイル、50-61km)、No. 8: fresh gale (*or* gale) (疾強風、39-46マイル、62-74km)、No. 9: strong gale (大強風、47-54マイル、75-88km)、No. 10: whole gale (*or* storm) (全強風、55-63マイル、89-102km)、No. 11: storm (*or* violent storm) (暴風、64-72マイル、103-117km)、No. 12: hurricane (颶風 (くふう)、73 [米国では74] マイル以上、118km以上)。ハリケーンが24時間以内に上陸する可能性がある場合には“hurricane warning” (ハリケーン警報)、36時間以内の場合には“hurricane watch” (ハリケーン注意報) が出される。
- 4) 熱帯の海洋に発生する低気圧は“tropical depression” とか “tropical cyclone” (1920年の初出語) と呼ばれ、温帯低気圧は“extra-tropical cyclone” (1923年の初出語) と呼ばれる。そして、アメリカ合衆国中西部で局地的に起こる破壊的な竜巻は“tornado” (1556年の初出語) と呼ばれる。オーストラリアの西海岸を襲う熱帯性低気圧は、*willy-willy* (1894年の初出語) とか *cyclone* と呼ばれる。Cf. I. R. Tannehill (1940: 3).
- 5) 台風の上陸地点の名前を付けた「室戸台風」(1934年9月) や、「枕崎台風」(1945年9月)、「伊勢湾台風」(1959年9月) は、昭和の三大台風と呼ばれている。これらの他に、日本には「アイオン台風」(1948年) や「ジェダイス台風」、「第二室戸台風」(1961年9月)、さらに、青函連絡船の「洞爺丸」(3,898トン) が座礁し、1,139人の死者行方不明者がでた「洞爺丸台風」(1954年9月)、伊豆半島狩野川流域の被害が甚大であった「狩野川台風」(1958年9月)、ドイツ人のシーボルトが観測した「シーボルト台風」(1828年; 文政11年8月) という台風の記録もある。この「シーボルト台風」は、観測者の名前であって、アメリカ合衆国のような様々の男女の個人名 (first name) を用いる方法とは異なっている。
- 6) 北西太平洋領域内における台風の年間発生数の平均値は26.7個である。そこで、これらの台風のアジア名は5年程度で一巡することになる。
- 7) その他には、木の名前や花の名前を用いた台風の名前が多い。中には、タイの6個目の「エメラルド」を意味する *Morakot* や、「こんにちは」を意味するミクロネシアの8個目の *Rananim* もある。さらに、フィリピンの3個目の「経験すること」という意の *Danas* のように、抽象名詞も、台風の名前に採用されている。
- 8) 日本語の和文通話表では、「無線局運用規則、別表第5号、通話表」によると、「朝日のア、いろはのイ、上野のウ、英語のエ、大阪のオ、為替のカ、切手のキ、クラブのク、景色のケ、子供のコ、桜のサ、新聞のシ、すずめのス、世界のセ、そろばんのソ、煙草のタ、ちどりのチ、つるかめのツ、手紙のテ、東京のト、名古屋のナ、日本のニ、沼津のヌ、ねずみのネ、野原のノ、はがきのハ、飛行機のヒ、富上山のフ、平和のヘ、保険のホ、マッチのマ、三笠のミ、無線のム、明治のメ、もみじのモ、大和のヤ、弓矢のユ、吉野のヨ、ラジオのラ、りんごのリ、るすいのル、れんげのレ、ローマのロ、わらびのワ、みどりのキ、かぎのあるエ、尾張のヲ、おしまいのン」、「° : 濁点」、「° : 半濁点」、数字は「一 : 数字のひとつ、二 : 数字の二、三 : 数字のさん、四 : 数字のよん、五 : 数字のご、六 : 数字のろく、七 : 数字のなな、八 : 数字のはち、九 : 数字のきゅう、〇 : 数字のまる」、記号は「一 : 長音、レ : 段落、( : 下向括弧、) : 上向括弧」と「、 : 区切点」と言われる。

- 9) *Merriam-Webster's online dictionary* で2005年に最もよく検索された語は“integrity”（〔道徳的・人格的に信頼できる〕誠実、高潔）で、第2位に“refugee”（避難民）、第6位に“tsunami”（津波）、第7位に“pandemic”（全国的流行の、世界的流行の）、第9位に“levee”（堤防）が入っている。この統計結果には英語を用いる人々の関心を持っている事柄の傾向、特に英語国民が“hurricane Katrina”（ハリケーンのカトリーナ）などの自然災害の被害に大きな関心を持っていたことが推察される。第3位には“contempt”（侮辱）、第4位に“filibuster”（議事妨害）、第5位に“insipid”（おもしろみがない）が入っている。自然災害とともに、政治不信への関心の高さが伺える。

### 主要参考文献

- Bagley, Desmond (1966) *Wyatt's Hurricane*. W.M. Collins Sons & Co. [矢野 徹 (訳) (2003) 『ハリケーン』 (ハヤカワ文庫NV376) 東京: 早川書房。]
- Ballentyne, D. W. G. and D. R. Lovett (1958, 1970 3rd ed.) *A Dictionary of Named Effects and Laws in Chemistry, Physics and Mathematics*. London: Chapman and Hall. [竹山 勝三・中村 宏樹・加茂 文三(編訳) (1980) 『人名のつく現象と法則の辞典』 東京: アグネ。]
- Das, P. K. (1968) *The Monsoons*. New Delhi, India: National Book Trust.
- Graham, Heather (2002) *Hurricane Bay*. New York: Mira Books. [せと ちやこ(訳) (2003) 『ハリケーン・ベイ』 東京: ハーレクイン。]
- 小林重順 (1974) 『日本人の心と色一色彩によるユニークな比較文化論』 東京: 講談社。
- 蔵治光一郎・保屋野初子 (編) (2004) 『緑のダム—森林・河川・水循環・防災』 東京: 築地書館。
- Larson, Erik (1999) *Isaacs Storm*. New York: David Black Literacy Agency. [島田三蔵 (訳) (2003) 『1900年のハリケーン』 東京: 文藝春秋。]
- 望月ひろみ (2005) 「ハリケーンの名前はなぜ人名なのか」『英語教育』(54巻9号、2005年11月号、東京: 大修館書店)、pp. 10-11。
- 日英言語文化研究会 (2005) 『日英語の比較—発想・背景・文化』 東京: 三修社。
- 大西晴夫 (1992) 『台風科学』(NHKブックス649) 東京: 日本放送出版協会。
- Stewart, George R. (1941, 1944) *Storm*. Washington, New York: Penguin Books.
- Tannehill, Ivan Ray (1940) *Hurricanes: Their Nature and History, Particularly Those of the West Indies and the Southern Coasts of the United States*. Princeton: Princeton University Press.
- 谷 恒生 (1994) 『大暴風—ハリケーン』(徳間文庫) 東京: 徳間書店。
- 吉村耕治 (2003) 「現代英語の変移と人権」 関西外国語大学人権教育思想研究所 『人権教育思想研究』6号、113-43。
- 吉村耕治 (2005) 「現代英語表現に見られる言語変革運動の成果」 関西外国語大学人権教育思想研究所 『人権教育思想研究』8号、118-41。

吉 村 耕 治

〔主要参照ホームページ〕

<http://www.aoml.noaa.gov/hrd/Landsea/history/index.html>

[http://www.nhc.noaa.gov/aboutnames\\_history.shtml](http://www.nhc.noaa.gov/aboutnames_history.shtml)

<http://www.nhc.noaa.gov/aboutnames.shtml>

(よしむら・こうじ 短期大学部教授)